

早春雪上播種の試み

1. 昨年の生産概況

昨年（H29）は、8月に台風が接近した影響等から雨の降る日が以後長期間続き、粗飼料の生産作業のみならず、草地更新作業の停滞をも招きました。なんとか完全更新を計画していたほ場に関しては9月中旬に播種を終えましたが、時間に余裕があれば追播を検討していたその他の裸地の目立つほ場については、10月以降の播種では発芽しても生育が十分でなく冬季に枯死する可能性が高いため、見送ることになりました。

2. 北海道の初冬季播種について

近傍の北海道では、播種作業に十分な時間が確保できない場合の代替的な手法として、霜が降りる初冬に播種する初冬季播種が実施されています。ただ、当场では初雪から根雪始め迄に寒暖の差が激しく、播種するタイミングを見極めるのが困難でした。

3. 早春雪上播種とは

そこで、東北農業研究センターから播種時期に柔軟性を持たせることが可能なもう一つの手法として紹介があり、ひとまず早春雪上播種と名付け試行したのが、融雪前に雪上にブロードキャスタで散播する方法です。このことについて、一連の作業の流れと作業のポイントを写真とあわせて以下にご紹介したいと思います。

本件に関して不明な点がありましたら当场の飼料生産係までご連絡下さい。



3月14日、雪解けが進み積雪深が70cm程度になったタイミングで、散播を実施。トラクターの踏圧により、30cm前後まで雪が沈み込んだ。

対象となったのは繁殖牛舎に近い放牧地で、オーチャードグラス主体ほ場であったが裸地が目立っていたため、追播適正の高いペレニアルライグラス（品種は放牧用で初期生育の優れるヤツユメ）を10a当たり1.5kg播種した。





融雪の様子（3月26日）。放牧地は奥羽牧場の敷地内の山側にあつて、多少の傾斜から融雪水が西側から東側へ流れ込んでいた。ペレニアルライグラスの種子は重さがあったため無事残存した。

土壌との密着のあまさから、定着率の低下が懸念されたため、ある程度ほ場が乾いた段階で鎮圧を実施。4月の第3週迄には新芽が確認できた。

右の写真は放牧後の6月14日時点の状況で、こちらは播種時と近い間隔で定着していたが、同日の下の写真のようなリター層に阻まれた部分ではあまり定着が見られなかった。



4. 期待される効果と作業にあたっての留意点

【期待される効果】

- ・ 肥料や薬剤の散布を行う春の繁忙時期を避け、時間にゆとりのある冬期間に播種作業を充てることができる。
- ・ 簡易更新の作業機のない場合や、耕起困難なほ場に追播を行う際に有効な手法。
- ・ 採草地においても、追播適正の高い多年生ライグラス（ペレニアルライグラスやフェストロリウム）の追播により、雑草の抑制効果やサイレージ品質の向上が期待される。

【留意点】

- ・ 本手法はあくまで補助的な追播方法であり、適期の追播に比べて定着率等は低くなる。
- ・ 播種時に積雪深が高すぎると作業機がほ場に入れず、低すぎると踏圧によりほ場を痛める危険性がある。
- ・ 通常の更新作業における覆土の行程が省略されるため、リター層で地肌が見えないような箇所やルートマットが発達した草地では定着が困難になる。放牧地であれば前年に放牧圧を高めておく、播種量を増やすなどの工夫が必要。